

ポジティブな行動支援 実践事例集Ⅱ



学習指導

授業改善

保育

学級経営

保健室経営

特別活動



今年度も徳島県内の教職員・保育者が
子どもたちのために
学校・園のさまざまな活動に
ポジティブな行動支援(PBS)を用いました。

「あなたの学校・園でも活用して
いただきたい。」

そんな思いで制作しました。
ぜひ、ページを開いてみてください。

CHAPTER① 特集 授業づくりにポジティブな行動支援の考え方を!

- 授業づくりにポジティブな行動支援の考え方を! ————— 2ページ
- 高川原小学校の事例 ————— 3ページ
- 鳴門西小学校の事例 ————— 4ページ
- 加茂小学校の事例 ————— 5ページ
- 授業コンサルティング体験談 ————— 6ページ

CHAPTER② 三好市の挑戦! 幼小中の接続や保健室経営にもPBS

- 幼小の接続に役立つポジティブな行動支援の枠組み ————— 7ページ
- 池田幼稚園・かめの子保育園・三野認定こども園の事例 ————— 8・9ページ
- 不安解消!小中接続にもPBS(先輩の話を聞こうプロジェクト) ————— 10ページ
- 保健室経営に役立つポジティブな行動支援の枠組み ————— 11・12ページ

CHAPTER③ 生徒と一緒に考える「ポジティブ行動マトリクス」

- 藍住中学校の事例 ————— 13ページ
- 「ポジティブ行動マトリクス」とは ————— 14ページ

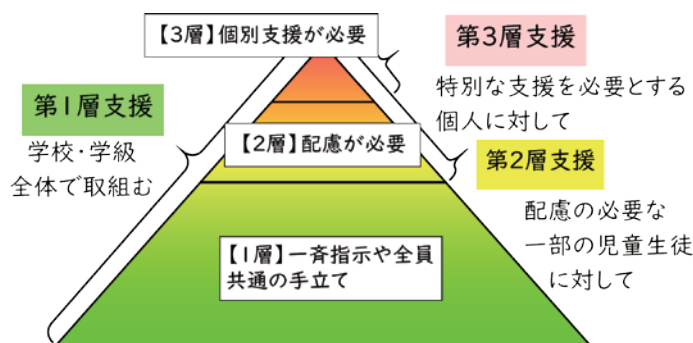
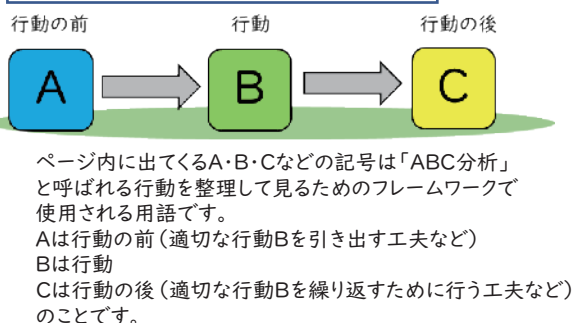
CHAPTER④ 学校に深く浸透するPBS ～がんばる学校リポート～

- 藍住北小学校・高越小学校の事例 ————— 15・16ページ
- 板野南小学校・神宅小学校の事例 ————— 15・16ページ

CHAPTER⑤ 学習指導に活かすポジティブな行動支援

- 学習指導に活かすポジティブな行動支援 ————— 17・18ページ

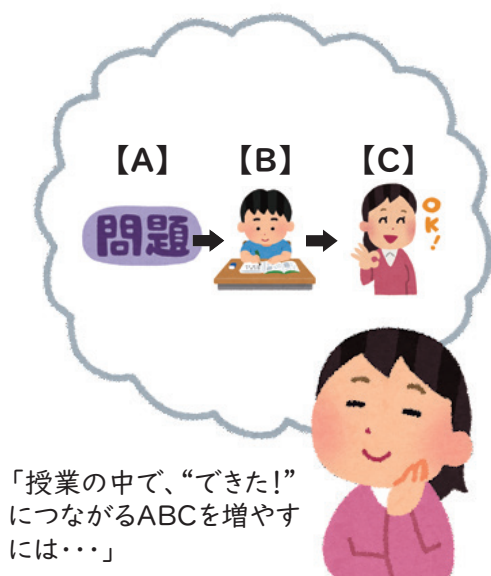
事例集をご覧いただく前に



ポジティブな行動支援に基づく授業づくり

ポジティブな行動支援では、具体的な行動（B）とその前（A）と後（C）の環境に注目するというABCの枠組みに基づいて支援を考え、実践します。ポジティブな行動支援に基づいて授業づくりをする場合にも、このABCの枠組みを活用します。ABCの枠組みで授業づくりを行う際のキーワードは、「できる授業」です。「できる授業」では、子どもの具体的な行動に焦点を当て、その行動が授業の中で「できる」ようになることを目指します。「できる授業」を実現させるための授業づくりでは、授業の準備段階で、授業中に「（教師が）何を教えるのか」「子どもは、何ができるようになるのか」を考えます。子どもに習得してほしい行動を考え、その行動を全員が授業の中で「できる」ようになることを目指して授業づくりを進めていきます。このクラス全員が「できる」ようになる授業を目指して、改善を繰り返すが、ポジティブな行動支援に基づく授業づくりです。

ここでは、ポジティブな行動支援に基づく授業づくりを行うための鉄則のいくつかを紹介します（島宗 2004）。



【鉄則】何を教えるかをはっきりさせる

できる授業では、教える内容を具体的な行動として考えます。この授業を通して、子どもたちは授業前にはできなかったようなことができるようになるのかを具体的に考えます。

【鉄則】「わかりました」で安心しない

授業で教える内容が「わかったかどうか」の基準を、具体的な行動が「できるかどうか」という形で考えます。子どもたちが「わかりました」と言っても、本当にわかっていのかどうかは保証されません。もちろん、「わかりました」と言っても本当にわかっていない子どももいますが、中には本当はわかっていないのにとりあえず「わかった」と言っている子や、本人はわかったと思っているけれど実際にはわかっていない子がいます。自分がわかっていのかどうかは「わかる」ということ自体が難しい子どもがいるということです。

「できる授業」では、「わかったかどうか」の判断を、教えた行動が「できたかどうか」で行います。そのために、授業前に「わかったかどうか」を判断するための問題や質問等【A】と、それに対する適切な行動【B】を考えます。「どんな問題や質問に対して、何ができたらいのか」という形で確認問題（A）↓【B】を考え、この確認問題が、授業の中で全員「できる」ようになるために、どうすればいいのかという視点で授業づくりを行います。

【鉄則】行動を見せて、やらせて、確認させる

授業の中で行動が「できる」ようになるためには、①行動を説明する／見せる、②行動させる／練習させる、③習得を確認させるの3つのステップが重要です。ここでは特に、②と③について解説します。

②行動させる／練習させるのステップでは、教えた行動を子どもたちにやらせてもらって、その行動を観察し、できていればそのことを伝えます（ポジティブなフィードバック）。練習のために問題・質問【A】を提示して、適切な行動【B】ができたなら、そのことに対してポジティブなフィードバック（「正解!」等）【C】を提示するという「できた!」につながるABCを「ラインユニット」と呼びます。このラインユニットをくり返し体験することで、子どもたちは成功体験の中で、授業内容の理解や定着を進めていくことができます。

きるのです。

クラス全員のラインユニットを授業の中でいかに多く作り出せるかが、ポジティブな行動支援に基づく授業づくりのポイントです。

教えた行動を子どもにやらせてもらって、できていない場合は、追加で説明したり、見本をみせたりします。このときに説明して終わりではなく、すぐにもう一度やらせてもらって、本当にできるようになったのかを確認します。もしできていけば、ポジティブなフィードバックを行い、できていなければ追加の説明を行うことをくり返し、ラインユニットを成立させていきます。

③習得を確認させるのステップでは、子ども自身に自分がどれくらいできるようになったかを確認させます。②のステップで練習とフィードバックを繰り返しているのので、そこからどれくらいできるようになったのかや、習得のために、あとどれくらい練習が必要か等を自分で評価させます。

授業の中でラインユニットを成立させるためには、①行動を説明する／見本を見せるのステップももちろん重要ですが、これと合わせて、実際に子どもが行動する機会を設けることも重要です。授業の中で①のステップと②のステップをバランスよく配置して、全ての子どものラインユニットをできるだけ多く成立させることが「できる授業」を実現させるポイントです。

【鉄則】改善に役立つ評価をする

授業内容が「わかったかどうか」を評価するための確認問題（A）↓【B】を実施して、その結果（データ）をもとに授業を改善します。確認問題の結果等の子どもの学習状況のデータから子どもたちがこの授業で「何をどこまで学ぶことができたか」を確認し、必要に応じて授業内容を見直し、改善を繰り返すことで、ポジティブな行動支援に基づく「できる授業」づくりを進めていくことができます。

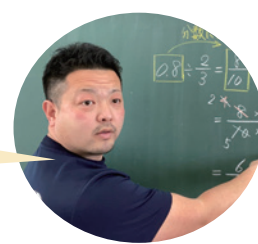
【推薦図書】

島宗 理（2004）インストラクショナルデザイン…

教師のためのルールブック 米田出版

毎日の授業で行う第一層支援

高川原小学校では、前年度に引き続き、大阪樟蔭女子大学の田中善大先生からアドバイスをいただきながら、授業づくりにポジティブな行動支援（PBS）の手法を活かした取組を進めました。



笹川 亨教諭

私の学級では、発表のための挙手が2〜3人で、決まった児童とだけ授業が進んでいるところに課題がありました。

算数科の学習で重要な「練り上げ（自力解決）」をどう進めるか。以前は、問題を読んで「さあ、考えてみよう」と指示していたが、最初から最後までを児童が自分で練り上げるスタイルの授業では、いわゆる「わかる」子しか授業に参加できなかった。もう少し授業の進め方やマネジメントを工夫できないものか・・・

算数科の授業の様子をビデオで撮って田中先生に見ていただきました。田中先生からは、次のようなアドバイスがありました。



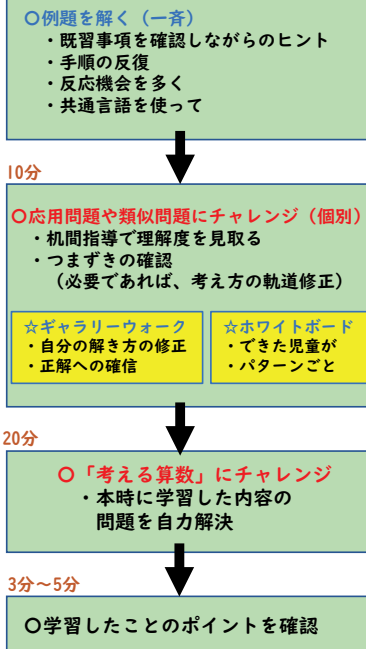
授業の四十五分の中で「引き出したい行動」を児童が何回するか、ということが大事です。これが多いほど、児童の行動が定着しやすい（学習目標が達成しやすい）ですよ。

笹川先生の授業はもとも児童が「反応する機会」や学習した内容を「練習する機会」が多いので、もっとこれを充実させていきましょう。

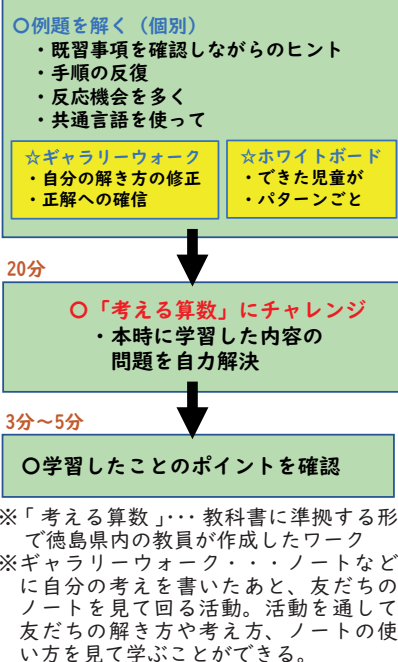
授業マネジメントを改善

児童が授業の中で「わかった」「できた」と感じ、学習意欲を引き出せるように、授業時間のマネジメントを意識するようになりました。そのために、本時のめあてを分かりやすく、そして、めあてを達成するために、おさえるべき指導のポイントは何かを明確にもって授業をするようにしました。

5分〜10分 【授業パターンA】



15分〜20分 【授業パターンB】



児童が少しずつ思考を重ねて練り上げていく「小練り上げ（児童への説明を細切れにして、頻繁に反応する機会をとり、児童を実際に動かすこと）で、理解度を確かめること」にすると、どの子も参加しやすく「これくらいならできそうだな」という感覚をもたせることができました。

児童自身が「わかる」↓「できる」という成長も実感しやすいと思います。「小練り上げ」は、進度やポイントなどを確認しやすく、授業のテンポをつくりやすくなりました。

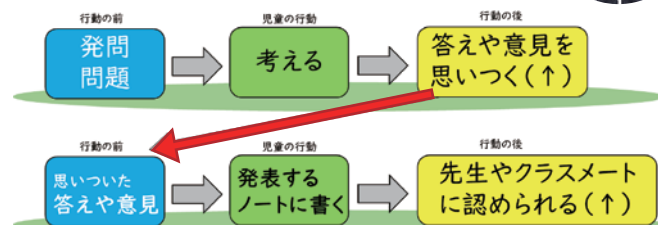
笹川学級から学ぶ 授業のポイント

学級全員が単元目標を達成するため、やるべきことを明確に教示（指示）できている！

- 授業のゴール（到達点）から、授業を逆算して組み立てる「何の習得（意味理解）ができればよいのか」
- 授業をテンポ良く進め、児童が思考する場面を小刻みにして、理解をそろえている
- 説明や発問では、児童全員が反応できる機会をとっている習得までの練習回数が多い
- 「わかった！」つもりを防ぐ 一人で「できた！」が最終形 45分でそこまでたどり着くことができる
- 児童全員が身につけてほしいことを、繰り返し練習し、習熟できている ←ここがキーポイント！

「授業を通じての第1層支援は有効」

おおっ！
児童たちが自分で“考える”部分でも、説明を細かく刻むことで、学級全員が思考を深め、その上、PBSができる！



「自分で考えて、それを発表したり、ノートに書いたりして、それが教員や友だちに認められる」という成功体験が、次の機会での「発表しよう、ノートを書こう」という行動だけでなく、「自分で考えてみよう」という行動にもポジティブな影響を与えていますね。



学習者に学ぶ授業の改善

鳴門西小学校では、本年度、畿央大学の久保賢一先生からアドバイスをいただきながら、授業づくりの視点からポジティブな行動支援（PBS）の手法を活かすための取組を進めました。



坂東 侑亮 教諭

私の学級は、活発で素直な児童が多くいます。授業中は静かに集中できているのですが、教員の指示がないと動き出せない児童がほとんどで、もっと積極的に思考したり行動したりしてほしいな、と思っていました。



大久保先生

授業中一人で考える時間を十五分近く設定されていましたが、単元のはじめの方でしたが、ヒントが少なめでした。

一人で考えられない児童たちが不安そうでした。



第1回目のコンサルテーションを受ける前の授業の様子



【ビデオ視聴後のアドバイス】

児童の「わかった」を引き出すため、ヒントを多めに練習機会を増やしましょう。

机間指導のときに、赤ペンを持って、児童ができているところを見つけて即座に○をつけて回しましょう。

ペアトーク、グループワークの機会を増やしましょう。



大久保先生からいただいたアドバイスを授業の中で採り入れて、授業を改善していきましました。

ヒントの出し方の工夫と即時フィードバック

以前は「ヒントカード」を、様子を見て個別に配付していましたが、アドバイスを受けて、授業の最初からヒントを多く教示し、練習問題を解き進めていく過程でヒントを減らしていくようにしました。

また、以前の机間指導は個別指導が中心でしたが、やり方を変えて、赤ペンを持って児童の間を回り、児童が自分の考えや解き方を記述していたら、すばやく○をつけて回りました。初めは大変でしたが、慣れれば問題なくできました。予め○をつけてもらうことで、自信を持って発表できる児童も増えました。



授業中の机間指導の様子 すばやく○つけ

ペアトークやグループワークによる不安の解消

授業中に児童が自分で考えて問題を解決してほしいという気持ちがあり、いわゆる「自力解決」の時間を長くっていました。

しかし、アドバイスを受けて改めて授業中の児童の様子を観察すると、自力解決では児童の思考が深まらない様子が見えてきました。

そこで、授業における、思考を要する場面で、自分の考えをまとめさせたあとに、ペアや、近くの席に座っている児童のグループで意見交換ができるように、座席配置の工夫などの仕掛けをしました。自分の考えたことを表現する機会をとることで、子どもは思考が深まりやすくなり、教員が授業をテンポよくできるようにになりました。また、取組の副産物として、児童同士で教え合う様子も多く見られるようになりました。



算数科の問題を教え合う児童たち

授業中の練習機会の確保

学級の中で、学習面で第二・三層支援が必要な児童に最も有効な手立てであったのが、授業中に練習する機会を確保することでした。算数科で主問題を行った直後に、数字のみを入れ替えた同一問題や、類似問題の提示を行いました。また、進度の速い児童用のステップアッププリントも作成しておき、進度の幅が出ても対応できるように配慮しました。

この手法は、技能を必要とする単元など、練習量だけではカバーできない単元については、さらに配慮する必要がありますが、計算が主体の単元では、全体のやる気の高まりにつながりました。



（二回目の授業を見て）

児童の反応に合わせて授業を工夫しながら進めているところが、とても素晴らしい！

私の学級には、これらの工夫が合っていました。しかしどのような方法が有効な手立てとなるかは、学級や児童それぞれに違うと思うので、観察が必要です。

そして何より、児童が四十五分の中でどれだけ授業内容を理解できたか、ということを重視するようになりました。

今回の取組で気がついたこととして、教材研究も重要なことですが、「学習者」の研究も重要だということがわかりました。

特に坂東先生が授業の中で仕掛けを作り、テンポよく授業を進めることで、児童の反応を引き出し、児童が理解しているかどうかを確認しながら進めていたところがとてもよいです。

児童の学校生活の大半は授業です。この授業でこそポジティブな行動支援に取り組み、児童との間にプラスのサイクルを回していくことは、とても意味がありますね。



加茂小学校の事例

挙手以外の方法でも「できた」を表現させる

授業の中で「できた」を増やす



授業づくりのポイント

①全員が「できた」となるように
②授業中に獲得してほしい行動を、すべての児童が「複数回行う」ことができるように

授業の中での「反応機会」が多くていいですね。「ノートを前に持って行く」などの『全員対象』の反応機会の設定が上手ですね。授業中の説明や机間指導の時に、『全員対象』で複数回フィードバックを行っているのがいいですね。

【ビデオ視聴後のアドバイス】



森長 拓哉教諭

四月初、学級の中では学力差が大きく、積極的に挙手する児童も少なかったです。行動面での課題がある児童も数名おり、学級としてのまとまりが、あまり感じられませんでした。

加茂小学校では、授業の中で「わかった」と感じるだけでなく、「できた」と自信を持って言えるような授業を行うために、大阪樟蔭女子大学の田中善大先生からアドバイスをいただきながら、PBSの手法を活かした授業づくりを進めました。

「わかった」を「できた」にする授業づくり

全員が参加できるアウトプットの機会を増やす

問題を声に出して読む

ノートを前に持って行く

ペア・グループ学習

ギャラリーウォーク

該当の意見に挙手

…「Aだと思う人」「Bだと思う人」「分からない人」等の中で自分が該当する意見に挙手する

言語化・動作化

…計算方法等を、キーワードや動きにして覚える方法

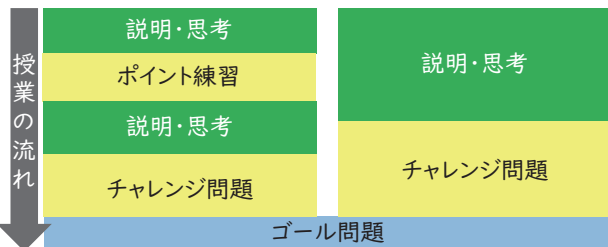
「全員が対象」で簡単なこと参加しやすいこと

授業の中で、子どもたちが動く機会を増やすと、指示や授業内容が理解できているかどうかを視覚化することができ、子どもへのフィードバックの機会も増えます。アウトプットの頻度を高めることで、子ども自身が「できた」を実感する機会が増え、全員が「できた」を表現することにつながります。また、授業の序盤に「全員を対象」として、簡単に誰もが参加しやすい内容で子どもたちの行動を促すことで、授業への参加度が格段にアップします。問題を声に出して読むことや、立式ができればノートを前に持って行くことなどは、簡単でおすすめです。

みんなが「行動」する授業へ

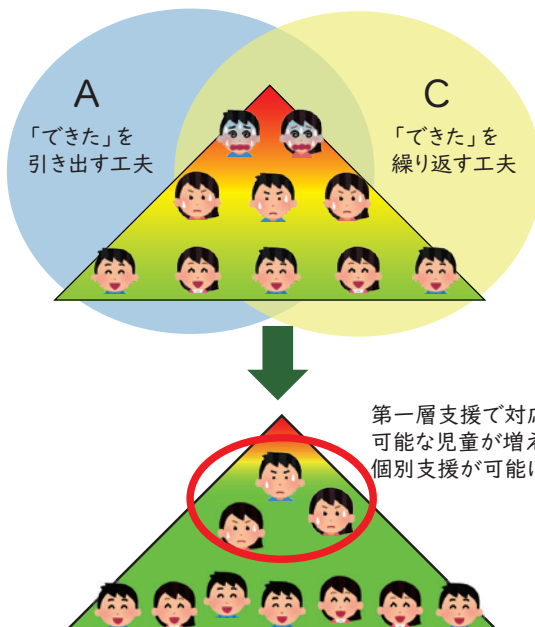
練習の機会を工夫する

練習の機会を工夫することで、授業の中でできるようになってほしいことを「複数回行う」ことができます。ゴールにたどり着くまでのステップを細分化して考え、つまづきが予想される部分の練習をしたり、ゴール問題の類似問題（数値や単位を変更）を設定したりすることで、効果的に練習を行い、授業の最後に「一人できる」を目指しました。説明や思考の時間はテンポ良く行い、練習の時間を設定することで、「できた」を実感する機会が増えました。



※ゴール問題…授業の中で「一人ですべて」を目指す問題
※ポイント練習…つまづきが予想される箇所を部分的に練習すること
※チャレンジ問題…ゴール問題の類似問題

「全員対象」の第一層支援としての授業づくり



行動面での不適切な行動は、ほとんどなくなりました。授業中に挙手をする子どもも増え、子ども同士で教え合う姿も見られるようになりました。学力の差も少しずつ縮まってきます。第一層支援としての授業づくりをすることで、授業がしやすくなりました。

A

B

C

適切な行動を引き出す工夫

子どもの適切な行動

適切な行動へのフィードバック

全員が参加できるプラスのサイクルを授業の中にたくさん取り入れることで、子どもたちの反応がどんどん良くなりましたね。授業中に「全員対象」の第一層支援を行うことは、授業中の「できた」に効果絶大です。授業のゴールを明確にして「何を教えるか」を細分化して考え、子どもに合わせた方法で授業づくりをすることが大切です。



「わかった」授業から「できた」授業を目指して



高川原小学校教諭 山川 友貴

「次の授業は？算数かあ…。」
こんな言葉がよく聞こえた一学期。算数に苦手意識の強かった子どもたち。教室の空気が毎朝重たくなるのを感じていました。

しかし授業コンサルティングを受け始めてから、少しずつですが、子どもたちの表情が明るく変わってきたように思います。それは、

①とにかく細切れた反応機会

②「わかったつもり」をなくす

この二つの意識をもつようになったことが要因だと考えています。

①とにかく細切れた反応機会

授業の中で「読める人」「書けた人」など当たり前を感じるようなことでも、自分と子どもたちとで確認し合う機会を設けました。また、自分の考えを書いた後には「隣と確認」、意見が出ないときには「近所で相談」のように、子ども同士でコミュニケーションをとるようにしました。一時間の中に何度も反応する機会を設定することで、全員が授業に参加している意識をもてるようにしています。子ども同士でコミュニケーションをとることで、算数が苦手な子ども気軽に友達に相談できるようになってきました。

②「わかったつもり」をなくす

授業終盤になると「じゃあ『考える算数』ですね」という声が聞こえてきます。意見交流↓まとめ↓ふりかえりの途中でチャイム。これまでの自分は、この流れをよく繰り返していました。ふりかえりには「わかった」などの言葉が並んでいます。しかし、問題を解きはじめると困り顔が…。

そこで、一時間の中でわかったことを活用し、実際に問題を解いていくような授業に変えていきまし

た。練習問題を繰り返すことで、その時間のうちに子どもたちの学習の習熟度が高まったように思います。

現在では、【授業三十分+練習問題十五分】を目標に授業づくりをしています。そのために授業の中で話す言葉を精選したり、発問や教材を工夫したりするようになりました。

一日の大半は授業です。その授業の中で子どもたちを伸ばしていけるよう、今後も子どもたちが「できた」と感じられる授業をつくっていきます。

みんなで聞き方キラリさん

鳴門西小学校教諭 篠原 結衣

私の学級は一年生なので、児童に身につけてほしい行動の練習を学校生活の中で意識して行っているかどうか、と大久保先生からアドバイスをいただきました。

私の学級の児童たちは入学から繰り返し声をかけ続けて、担任が前に立つと、さっと担任の方を見るようになっていました。しかし、発表者の方へ身体を向けて聞くなど、友だち同士で望ましい行動はあまり起きていませんでした。そこで、「聞き方キラリさん」の取組を紹介してもらい、早速授業で取り組んでみました。

繰り返し練習し、称賛していくことで身体を向ける行動が定着しました。また、次第に児童たちに変化が見え始め、学校生活にも影響してくるようになりました。問題行動もだんだんと減少し、課題に取り組む姿勢も変わってきました。

「目、耳、おへそ、心話し手へ向ける」

私はこれからもこのことを大切に、みんなで「聞き方キラリさん」を目指します。



篠原学級の授業の様子 発表者に注目している

子どもも教員も「達成感」のある授業へ



加茂小学校教諭 藤丸 みなみ

以前は、一生懸命説明しているつもりでも、何名かの児童が授業のポイントを理解できていなかったり、最終問題ができなかったりしました。そんな中、コンサルティングで田中先生からアドバイスをいただきましたが、授業のゴール（何ができるようにしてほしいか）をよく考え、教えたいことを分解してより細かくステップを設定しました。

授業内容を考える時も、児童に身につけさせたい力を明確にし、発問や問題を厳選することで、児童のつまずきやすいポイントが見つけやすくなりました。

毎日の実践の中で、教科書の課題をスモールステップで設定して、児童のできている行動を観察し、具体的な称賛の声をたくさん行うようにしました。

また、めあてが書けたら「書けました。」と言う、問題を解いたら先生のもとへ持って行くなど、授業の中で全員が反応し動く場面を意識して作るようにしました。

さらに、「わかったつもり」をなくすために、授業時間内に多くの類似問題を取り入れました。

これまでは、一、二問の練習問題をして授業が終わってしましました。しかしそれだけでは、「わかったつもり」になって、その日の授業内容の宿題が一人ではできない児童がいました。アドバイスを受けてから、より多くの類似問題に取り組ませることで、「問題を解いていく内にやり方がわかってきた。」「昨日の宿題は一人でできた。」との声が聞こえるようになってきました。

今では、算数の授業前には、「今日はどんな問題がでてくるのかな。」「今日は神レベルまでいきたい。」と教室の中に児童の前向きな言葉が増えてきました。これからも、児童の姿から学び続けられるような教員でありたいと思います。

監修 田中 善大（大阪樟蔭女子大学准教授）

三好市は、**ポジティブな行動支援の枠組み**を同市の教育上の課題の一つである「幼・小・中学校の円滑な接続」に用いています。

育てたい子ども像（目標）の共有

令和二年度に三好市では、市内二地区の就学前機関と小学校をモデルに、ポジティブな行動支援について理解を深めるため、まず職員研修会を行いました。

次に、各園・小学校の一年生担任や五歳児担任、特別支援教育コーディネーター、池田支援学校の特別支援教育巡回相談員（以下、巡回相談員）が集まり、現在の一年生の姿をもとに、育てたい子ども像について各小学校区ごとに協議しました。

各園の園児の実態を共有し、就学前教育の特徴（体験的な活動の多さ・遊びを通して発達を促す等）を踏まえた内容となるように、目標を検討しました。

その結果、「人の話を聞くことができる」ことを共通の目標として取組を進め、成果を上げることができました（令和二年度実践事例集I参照）。



目標設定のための情報共有会

三好市教育委員会



池田小学校・芝生小学校とともに、以前から学校規模でポジティブな行動支援に取り組んでいる

うまくいった手法の情報共有



ポジティブな行動支援は支援方法を共有することを重視しています。

上の図のように就学前機関と小学校で行動支援の手立てが重なっている部分が大きいと、園児たちは大きな環境の変化にも適応しやすくなります。

各園で共有した目標を達成するために実践を進める中で、それぞれの園が園児の実態に応じた工夫を凝らします（八・九ページ参照）。

特にうまくいった「支援方法」や「称賛のしかけ」などについての情報を情報共有会で共有することが、各園にとっても小学校にとっても有益です。

また就学前機関と小学校間で相互参観を行い、それぞれの取組の成果や手立てを直接見ることも、自らの取組へ還元することにつながりました



池田第一保育所での取組の様子



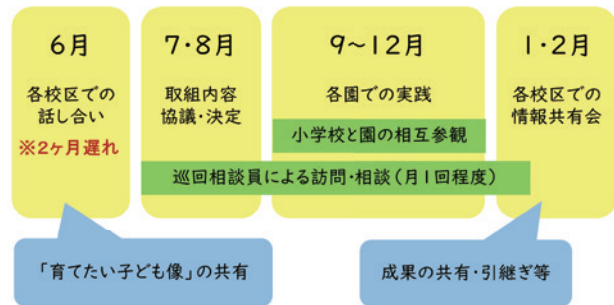
大泉保育園での取組の様子



池田小学校校区情報共有会の様子

さらに、全ての園児を対象とした第一層支援を充実させることで、第二・三層支援を必要とする園児の支援ニーズもわかるので、就学に向けて早期に対応することができるようになりました。

園を支える支援体制



幼小接続の取組の流れ（※新型コロナウイルス感染症の感染拡大により各校区での話し合いが約2ヶ月遅れた）

令和三年度には、各園からの要望により、五歳児に加え、四歳児にも実施対象を広げました。よりたくさんのお保育者が関わるようになり、三好郡の巡回相談員にも、それまで以上に各園・小学校への支援を行ってもらうことになりました。巡回相談員は、月に一〜二回程度各園を訪問し、直接取組の様子や学級の実施計画表を一緒に作成したり、目標達成につながる支援方法を一緒に考えたり、各園での保育者の実践を称賛したりしました。

また、園で実践を進めていく中で、手立てが有効に機能しない園児が出た場合は、その園児を再度よく観察し、別の手立てを考えたり、配慮を担任と一緒に考えたりしました。

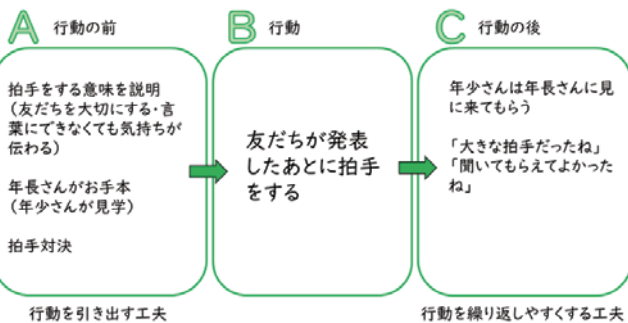
実践による保育者のスキルアップ

各園での実践を通して保育者に見られた変化として、
①園児のすてにできている望ましい行動を積極的に見つけ、さまざまな方法で称賛することが増えたこと。

②園児から望ましい行動を引き出すために、今まで以上に環境設定や仕掛けづくりを工夫するようになったこと。

が、「情報共有会」で報告されました。また、日常生活の中で発達段階に応じた遊びなどの活動を通して望ましい行動の練習をすることや、望ましい行動が他の場面にも広がり、できることが増えたことが（八・九ページ参照）各園から報告されました。

友だちが発表した後に、拍手をする



教員は「大きな拍手だったね」「聞いてもらえてうれしかったね」などの言葉かけを繰り返して、望ましい行動を称賛・承認しました。

コロナ禍で大きな声でのやりとりができなくても、拍手で気持ちを贈りあげています。



帰りの会の時、友だちの発表に拍手を送る

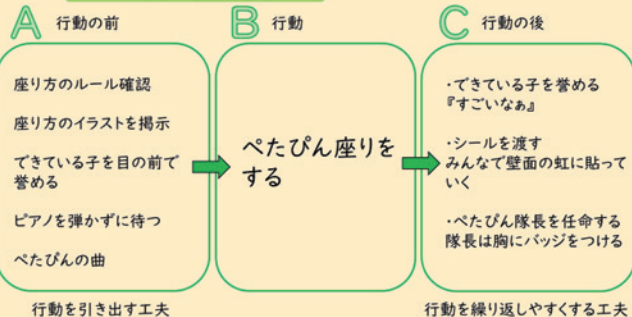
池田幼稚園の園児たちは、発表のあとで拍手という行動をはさむことで、より内容に注目して友だちの話を聞いたり、話し手に注目したりするようになりました。

また話し手の園児も、自分の話を聞いてくれたという気持ちになりました。

池田幼稚園年少・年長クラスでは、帰りの会の時に「友だちが発表したあとに拍手をする」ことを目標に、ポジティブな行動支援に取り組みました（左図参照）。

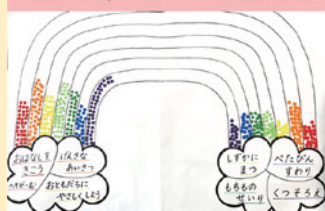
聞いていることを「行動」にして伝える

べたびん座りをする



歌の前に落ち着いてべたびん座りする園児

できた時にシールを貼る虹



べたびん隊長バッジ

写真にあるように、べたびん隊長を任命して胸にバッジをつけることで、役割を意識させたこと、行動ができたなら園児にシールを渡し、壁の虹をシールで埋めるようにするなどして、目標を持たせたことが効果的な手立てでした。



かめの子保育園四・五歳児では、朝の歌を歌う前に「べたびん座り（左写真参照）をする」ことを目標に、ポジティブな行動支援に取り組みました（左図参照）。

べたびん座りの取組をする前は、常に園児の誰かが話をしている、保育者が話をしようとする、と、ざわついていたりすることがありました。しかしこの取組を始めて、AとCの手立てを行うことにより、園児たちに自分が何を求められているのか伝わり、望ましい行動をとることができるようになりました。

バッジや掲示物など視覚的手がかりの活用

園児たちがある場面で行えるようになった行動が、条件が異なる場面（時間・人・場所・・・）でも同じように行動できることを、般化（はんか）と言います。かめの子保育園では、べたびん座りが、他の生活場面でも見られるなどの般化が見られました。

同じような場面での般化

指導の広がり



歌のあと、朝の会で起立する場面
落ち着いて保育者の話に注目することができています



くつをそろえて置くなど、日常生活の他の場面でも望ましい行動を意識するようになりました



【場面般化】外に出かける際 帽子をかぶることができた園児からべたびん座りする様子



【場面般化】絵本を読んでいる場面
座って活動する他の場面でも、姿勢よく座って活動することができています

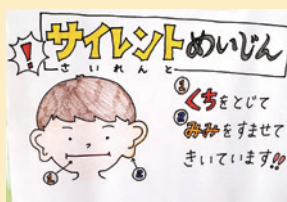
目標とする行動を正しく教え、生活の中で繰り返し練習し、園児に定着した方法で、ポジティブにフィードバックすることで、その行動だけではなく、他の行動や他の場面にも広げていくことができます。かめの子保育園の事例は、生活の様々な場面で、園児たちのよい行動をポジティブなフィードバックで育てることの重要性を教えてください。

興味・関心を高め園児の意欲を引き出す

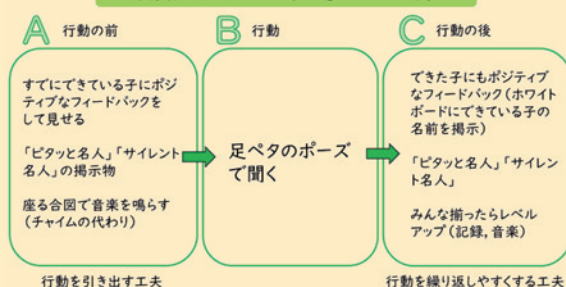
三野認定こども園五歳児では、朝の会で保育者が話す時「足ペタの姿勢で聞く」ことを目標に、ポジティブな行動支援に取り組みました（左図参照）。

取組を始める前は、活動に参加できない園児が数名いて、その子たちがそろろうのを待っていることがよくあり、また、そこで園児に「早くしなさい！」と言う前に、アニメでなじみのあるトランペットの曲をかけると、それを合図にして園児たちが集まってくるようになりました。

集まってきたから、話を聞くと静かにすることが難しい場面があったため、ポスター（上写真）を作成したり、そのポスターを使って、実際に十秒間静かにする練習をゲーム方式で行ったりしました。遊びながら繰り返し練習することで、静かに話を聞くことが難しかった園児たちも、落ち着いて保育者や友だちの話を聞くことができるようになりました。



保育者が話すときに「足ペタ」のポーズで聞く



サイレント名人の練習の様子

※「足ペタピン」：芝生小学校の一年生が姿勢をそろえる際に使っている合言葉

フィードバックの工夫として、レベルアップ表（下写真）を採り入れました。レベルアップするたびに、園児の前でゲームのレベルアップ音を鳴らし、行動の意識付けを図りました。



レベルアップ表

遊びの中で行動の練習をする

三野認定こども園四歳児でも、朝の会で保育者が話す時「話をしている人に注目して聞く」ことを目標に、ポジティブな行動支援に取り組みました。人の話を聞く練習をする際、園児の発達段階を考慮し、遊びを通して自然と行動が身につくような工夫を行いました。

遊びの中で自然と行う行動練習

【後出しじゃんけん】

園児たちがよくしているじゃんけんを活かし、後出しじゃんけんのゲームをしました。保育者に注目しておかないとじゃんけんで負けてしまうために、園児たちは保育者の方に注目して、必死に見ています。「負けた！」「勝った！」と園児のうれしそうな声が響きます。園児たちは遊びに夢中になっていますが、遊びの中で自然な形で行動の練習ができています。



後出しじゃんけんの様子
遊びの中で自然と保育者に注目している

保育者も、園児が保育者の方を注目できているか、すぐにフィードバックして、さげなく盛り上げます。

【食べ物クイズ】

園児たちは語彙数が増えてきて、言葉を使ったゲームを喜ぶようになってくる時期です。四歳児では、食べ物クイズを積極的に採り入れています。

このクイズは保育者がまず単語のテーマを決めて伝え、例えば果物なら、「みかん・・・ぶどう・・・いちご・・・一輪車」と四つの単語を読み上げるうちに、果物なら手をたたき、果物以外であれば×印を手で作るというルールで行います。



食べ物クイズの様子
遊びの中で自然と保育者に注目している

この遊びも、保育者に注目しておかないと、正しく反応することができません。目と耳を集中させてよく注目できるようにしました。また、一回ゲームが終わるごとに姿勢を整えるように言葉かけを行うと、「足ペタピン」を意識する機会も作れます。

【合図でピタツとゲーム】

このゲームは、保育者がじゃんけんのグーチョキパーの合図に合わせて、園児らと遊びながら、行動のコントロールを教えます。「わざと騒ぐ」という状況が園児らに好評で、そこからピタツと静かにすることも、ゲーム感覚で練習します。

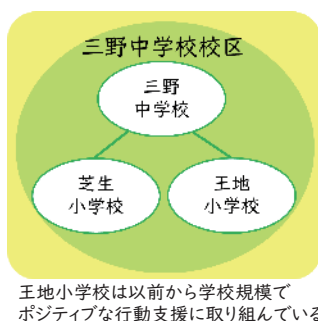
チョキ（足をバタバタしてわざと騒ぐ）
パー（騒がしく拍手をする）
グー（ピタツと静かにする）

飽きないように、数秒すると合図で行う行動を変えていきます。園児たちは今では、保育者のグーのポーズに合わせてすばやく静かにすることができるようになりました。無理に行動の練習をするのではなく、発達段階を考慮して遊びの要素を採り入れることで、園児たちは楽しながら自然と行動を身につけられます。

児童の不安の解消に向けた小・中連携

三好市ではさらに、小・中学校間の接続の際に生じる課題を解決するための取組を、市内の三野中学校区で行うこととしました。

実態把握のため、養護教諭やスクールカウンセラーへの聞き取りを行ったところ、中学一年生で、学習内容の高度化や量の増加に加え、中学校のシステムへの適応、部活動への参加など、生活の変化などがきっかけとなつて、自尊心の低下が起きていることがわかりました。



王地小学校は以前から学校規模でポジティブな行動支援に取り組んでいる

や中学一年生に対して心身の変化や中学校生活への適応の仕方について、正しい知識を体験的に教えることにしました。

具体的には、小・中接続の学年である小学六年生が、中学一年生から中学校生活についてさまざまな角度から教えてもらう「先輩の話を聞こうプロジェクト」を行うことになりました。また、時間管理スキルの獲得を目指して啓発授業を行うこととしました。児童生徒の発達段階を考慮し、積極的に参画できるように、「ピア・サポート」(※)の考え

方に基づいた取組を進めました。

プロジェクトは、小学校での大きな行事が終わり、児童の中で漠然とした中学校への不安が生じやすい十一月に設定して行いました。

※ピア・サポート・・・仲間同士が相互に体験や感情を共有し支援しあう精神的支援活動のこと

実態の把握

プロジェクト計画

事前アンケート実施(小学生)

プレゼン準備・発表練習(中学生)

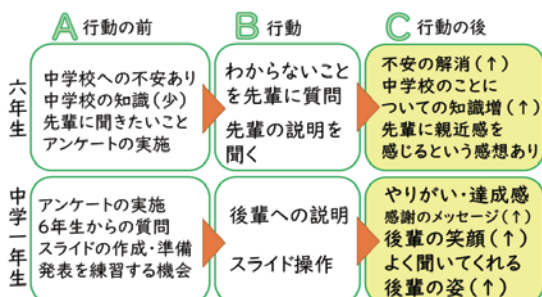
先輩の話を聞こうプロジェクト

事後アンケート

先輩の話を聞こうプロジェクトの流れ

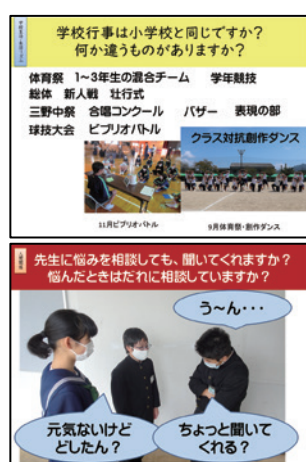
「先輩の話を聞こうプロジェクト」

小学六年生が中学校生活についての情報を、自分から得ることと不安を和らげることを目的として、プロジェクトを実施しました。



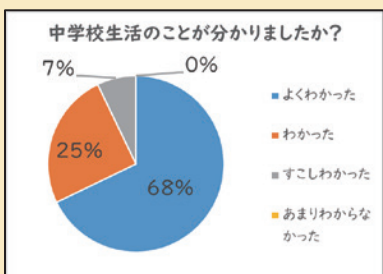
「先輩の話を聞こうプロジェクト」の枠組み

小学生に、先輩にどんなことを聞きたいのか事前アンケートを実施しました。小学生からは「どんなテストが、どんなタイミングでありますか?」、「休みの日も部活動はありますか?」、「睡眠時間は減りますか?」、「何時間くらい寝ているのですか?」、「悩んだらだれに相談していますか?」などが質問として出てきました。それをもとに、中学生が自分たちの生活を振り返って質問の答えを考えました。

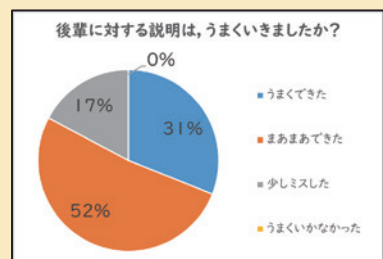


中学生が作成したスライド

先輩の話を聞く前の小学生らは、とても緊張していました。四か所の説明ブースを回って話を聞き終えると、緊張がほぐれて不安の解消につながったようでした。また、中学生も説明できたという達成感で、ホッとした表情の生徒がたくさんいました。



小学生対象の事後アンケート



中学生対象の事後アンケート



熱心に説明する中学生



集中して説明を聞いている小学生



密にならないように体育館で説明ブースを4か所設けて実施



先輩たちへの感謝カードの贈呈

事後アンケートでは、プロジェクトを行った結果、中学校生活のことが「よくわかった・わかった」と回答した児童が九割以上にのぼりました。また、中学生でも「うまくできた・まあまあできた」と回答した生徒が約八割にのぼりました。今後、このプロジェクトを継続し、不安が減った効果が学校生活にどのように表れるかを長期的に見極めていきたいと思います。

保健室の役割とPBS



保健室は全ての学校にあり、養護教諭は児童生徒の心身の健康管理や学校の衛生管理を担う重要な役割を果たしています。他にも、校内の児童生徒の心身の状態を把握する役割を担っており、鋭い観察眼で常に情報が集約されています。

また保健室を心のよりどころにして登校している児童生徒や、養護教諭には困ったことを相談できる児童生徒などもあり、保健室はたくさんの役割を担っています。コロナ禍において、その重要度はますます高まっています。

PBSを進めていく上でも、保健室は重要な役割を担っています。保健室には、児童生徒の心身の状態のデータが集まっています。例えば、けがなどの手当ての記録には、発生場所や発生時刻などが記載されています。それらは安全な学校づくりになかせない情報です。

左のグラフはあるPBS実施校の心理的な原因による保健室の利用件数です。PBS実施後は、利用件数が減少しています。



ある学校の保健室を心理的な原因で利用した件数

PBSが重視する「データによる意思決定」に欠かすことのできない情報、保健室にはあります。

校内で第一層支援を行う上でも、第二・三層支援を行う上でも、養護教諭との情報共有は必要不可欠です。

保健室の予防的な取り組み

三野中学校・芝生小学校・王地小学校では、養護教諭が中心となり、児童生徒の実態把握を行いました。その中で小学六年生が中学校へ進学し、生活リズムが大きく変化する際に、「睡眠時間」が減少する傾向にあることが報告されました。また、三好市で行っている番目調査（平成一九年（現在）では、睡眠と不適応の関係性が見られることがわかりました。

そこで、地域の公認心理師の協力を得て、養護教諭と学級担任が連携し「時間管理スキルの獲得」や「中一ギャップについての知識獲得」を目的として小学六年生と中学一年生を対象に授業を行うこととしました。

啓発授業は、「生活習慣と心の健康について考えよう」をテーマに、養護教諭と地域の公認心理師、学級担任と一緒に授業を行いました。

小学生から中学生への心身の変化や、中学生になったときによく起こりうる生活リズム上の問題などの知識の獲得、対応策、相談への動機付けなど幅広く扱いました。また、授業前の一週間の生活リズムを自分で記録し、授業での振り返りに使いました。授業後にも学んだことを活かして実際に一週間の生活リズムを記録し、睡眠時間を確保するために効率的な時間の使い方について体験的に学びました。



「生活習慣と心の健康について考えよう」授業の様子（芝生小学校）

記録には時間の流れが可視化されてとらえやすい「ガントチャート」を用いました。提出された生活リズム記録表に、養護教諭や学級担任が個別に称賛メッセージを記入しました。

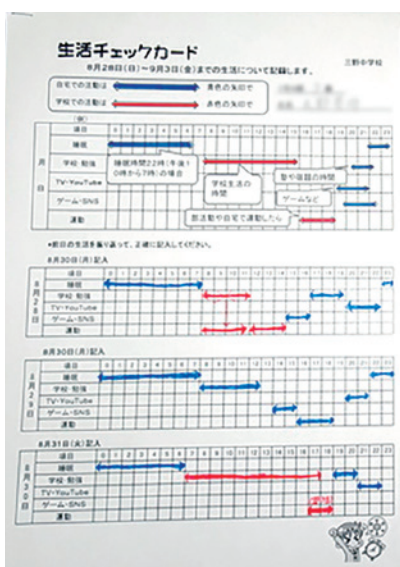
小学校では、啓発授業の前に「中学生になるとこういうふうな生活が変わるのではないかな」と予想する日記などを児童に書かせて意識を高めてから授業を行いました。



「生活習慣と心の健康について考えよう」授業の様子（三野中学校）

さらに、中学生に対しても同じように授業を行いました。生活リズムの変化を実感している生徒が多く、睡眠時間の確保を目的としてそれまでの時間の使い方を中心に、自分の生活を振り返りました。

授業をきっかけに、具体的な取組として「みんなでつくる睡眠タワー」を行うことになりました。



ガントチャート方式で記録した生活チェックカード

想像していた答えはここにありますか？

- 新しい教科や定期テストがあり、成績に順位がつけます
- 先生との関係も学級担任制から教科担任制へと変化します
- 他の小学校出身者との新たな出会いや成長に伴う友人関係の変化があります
- 部活、課外活動、塾など新しい取り組みがスタートしたり、そこで先輩・後輩といった今までと違った人間関係を築くようになります
- 自宅から学校の距離や、通学の方法が変わることがあります

これら一度に起こる大きな変化を「中1ギャップ」といいます

・眠る前の LINE、ゲーム、スマホには要注意

- メールやLINE、Twitter、文章を書く作業は脳を活性化
- スマホやゲームの画面を目の前でみつめることは特に注意です

聞いたことがあるかな？ブルーライト

ブルーライトは朝の太陽光と同じ波長で脳を刺激

寝付きを悪くする

「生活習慣と心の健康について考えよう」で用いたスライド（一部抜粋）

これらの資料は、公開しています！

特別支援まなびの広場

検索

詳しくは総合教育センターホームページ



みんなで作る睡眠タワー

ポジティブな行動支援では、「具体化・行動化すること」や「可視化すること」も重要な支援の要素と考えています。

三野中学校では、啓発授業で得た知識を生徒の実際の生活に活用するために、睡眠タワーの取組を始めました。

睡眠時間のチェックをするときに、ただ時間をチェックシートに記録していくのではなく、チェック用紙にシールを貼ったり、睡眠タワー（下写真参照）の自分の睡眠時間に該当するペットボトルにビー玉を入れたりしました。このようにすることで取組の過程を可視化し、記録をする行動への動機づけを高める工夫を行いました。

また、睡眠時間を確保するために「時間を管理するスキル」も重要です。各校では、生徒に一日の過ごし方をガントチャートに記入させ、時間の使い方を可視化しました。

個人ごとに〇時までには寝るという目標を設定しました。

睡眠時間を7時間以上とる

A 行動の前

「啓発授業」での知識
家族からの言葉かけ
スケジュールの可視化
〇時までに寝るという
個人目標設定

B 行動

睡眠時間を
7時間以上とる



C 行動の後

コンディション
良好(↑)
睡眠タワーにシール
を貼る・ビー玉を入
れる(↑)
仲間や教員からの
称賛(↑)

生徒の感想

左の写真のように、生徒がアクセスできるところに睡眠タワーを作り、取組開始から、一週間ごとに睡眠時間を自分で記録するようにしました。

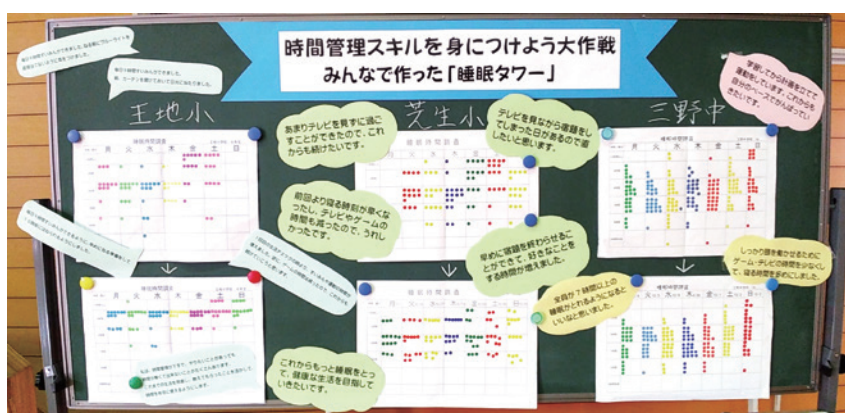
進捗状況が即座に可視化されフィードバックされるために、時間を管理して睡眠時間が増えたことが、誰にでも一目でわかります。それをきっかけに動機付けが高まる生徒もいました。



1回目調査

2回目調査

取組が終わってから生徒に感想を聞いたところ、睡眠時間が増えた生徒がほとんどで、肯定的な意見が寄せられました。



各校の取組結果を養護教諭が称賛する様子



三校の児童生徒が集まった際に養護教諭から、ポジティブなフィードバックに加え、睡眠タワーの取組が生活に良い影響を及ぼしていることをもう一度説明しました。

三野中学校区での取組は、養護教諭が予防的に心身の健康のための教育を行う際も、PBSが活用できることを示唆しています。
声をかける・説明して終わるだけではなく、児童生徒が経験的に学べるように具体的に行動化することで、学校生活やその後のキャリアで役立つスキルを身につけさせることは重要です。

何が望ましい行動なのか、生徒たちと一緒に目標を考える

藍住中学校では、本年度から本格的に学校規模でポジティブな行動支援に取り組みようとしています。そのために「ポジティブ行動マトリクス（行動目標設定表）」を設定しました。そのプロセスを紹介しましょう。

まずはじめに、ポジティブな行動支援とは何かについて、その基礎となる考え方の職員研修を行い、教職員間で共有しました。藍住中学校は、総合教育センターの要請訪問を活用しました。



要請訪問研修会の様子

次に生徒達の「将来の姿」に関する教職員の想いを共有し、これを踏まえた上でポジティブ行動マトリクスの「3つの大切（下図の黄色枠部分）」と「指導面（水色枠部分）」を教職員で意見を出し合い決定しました。



※ポジティブ行動マトリクス設定研修会の様子

次に生徒会が主体となって「ポジティブ行動マトリクス」の身を考えました。「パワフル」「スキルフル」「ハートフル」の3つの班に分かれ、それぞれの場面で望ましい行動を具体的に考えました。



話し合いの様子（ハートフル班）



話し合いの様子（パワフル班）

生徒会役員たちは、自分の毎日の学校生活を振り返りながら、あと少しでもできそうなことや課題となることを話し合い、具体的な目標を練っていききました。その際、禁止表現（～をしてはいけない）など否定形の目標にならないように気をつけていました。

何事にも挑戦！P S Hを中心に進化する藍中！

	パワフル P	スキルフル S	ハートフル H
登下校	<ul style="list-style-type: none"> 自分から相手に聞こえる声であいさつをしよう。 早寝早起きして、余裕を持って学校に来よう。 	<ul style="list-style-type: none"> 左側を一路通行しよう。 まっすぐ登下校しよう。 	<ul style="list-style-type: none"> 道を譲ってくれた車に会釈しよう。 歩行者のために道を空けよう。
授業中	<ul style="list-style-type: none"> 積極的に手を挙げて発表しよう。 わからないときでも、くじけず、ねばり強く、学習しよう。 	<ul style="list-style-type: none"> 集中して人の意見を聞こう。 自分なりにノートを工夫してつくろう。 	<ul style="list-style-type: none"> うなずいたり、拍手したりして発表しやすい雰囲気を作ろう。 プリントを配られたときは感謝の言葉を伝えよう。
休み時間 (給食も含む)	<ul style="list-style-type: none"> 素早く、次の授業の準備をしよう。 換気をして、教室環境を良くしよう。 	<ul style="list-style-type: none"> 一分前着席を心がけよう。 次の授業に向けて、予習・復習をしよう。 	<ul style="list-style-type: none"> 相手の目を見て話そう。 人が通りやすいように、ドアや道をあけよう。
清掃	<ul style="list-style-type: none"> 時間いっぱい清掃をしよう。 どの分担でも精一杯やり遂げよう。 	<ul style="list-style-type: none"> 1か所でも多く、汚れやゴミを取り除こう。 グループで協力しながら効率よく掃除をしよう。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の分担が終わったら、他の人のことを手伝おう。 道具を大切にしよう。
部活動	<ul style="list-style-type: none"> 体調管理をしっかりしよう。 「ドンマイ」や「ファイト」など励ましたり、元気づけたりする声をかけよう。 	<ul style="list-style-type: none"> 前向きにコツコツと努力し、技術を向上させよう。 アドバイスをしっかり受け入れよう。 	<ul style="list-style-type: none"> 「おつかれ」「次一緒にがんばろう」「上手」など誰にでも前向きな声をかけよう。 準備や片付けを進んで手伝おう。



話し合いの様子（スキルフル班）



ポジティブ行動マトリクスの中身を考えている様子

約九〇分ほどで目標を最後まで練り上げることができました。生徒が自分たちの学校をよりよくするために、自分たちが主体的に動く。その取組みの一つとしてポジティブ行動マトリクスづくりは有効であると思います。次年度以降、藍住中学校でポジティブな行動支援に基づいた生徒主体の取組が進んでいくことを期待しています。

「ポジティブ行動マトリクス」とは？

PBSが目指すものと「望ましい行動」

ポジティブな行動支援（PBS）は、子どもの望ましい行動に着目して、これを積極的に伸ばしていくアプローチです。その目的とするところは、すべての子どもと学校関係者（教職員、保護者、地域住民等）のQOL（生活の質、人生の質）の向上です。つまり、PBSで伸ばしていく子どもの「望ましい行動」とは、子ども本人や子どもに関わる人々の人生をより豊かにすることに繋がるような行動です。例えば、「大人の言うことをただ黙って聞く」「他人に迷惑をかけない」というような目標設定では、子ども本人のQOL向上には繋がらないでしょう。PBSでは、積極的で肯定的な「望ましい」行動を目標として設定していきます。

それでは、子ども達や学校関係者のQOL向上に繋がるような「望ましい行動」とは、どのような行動でしょうか？

これには決まった答えはないのですが、一つ言えるのは、子ども自身や学校関係者がその行動ができることに「価値」を感じ、その行動を「できるようになりたい！」「できるようになって欲しい！」と思える行動だということです。この何に価値を感じ、何を望ましい行動と考えるかは、子どもによって、あるいは教職員によって少しずつ異なっており、その多様性はとても大切です。しかし、あまりにも目指す方向性がバラバラだと、子ども達にとって何を目指したらよいのかわかりにくいですし、教職員も指導の方向性がバラバラになりがちです。幼・小・中・高の各段階において、子ども達は三〜六年間かけて育っていきます。その際に目指す方向性がその時々担任教員によってバラバラでは、子ども達が混乱しますし、何より望ましい行動が一貫して育っていきません。

ポジティブ行動マトリクスとは？

そこで、学校全体でPBSに取り組む際には、まず各教職員が考える望ましい行動が何かや、そもそも子ども達に期待する姿は何かについて意見を出し合い、共有し、皆が納得して「これを目指そう」と感じられる目標を立てます。

この学校全体で共通した目標を立てるために、「ポジティブ行動マトリクス」と呼ばれる、「学校で期待される姿」とそれを学校の各場面・場所において行動レベルで具体化した表を作成します。これによって、学校全体で目指す姿と、具体的に何をすれば（どのように行動すれば）その姿に近づくのが明確になります。

ポジティブ行動マトリクス作成の際には、いきなりその内容について検討するよりも、子ども達に期待する「将来の姿」について、各教職員の想いを共有することから始めるとよいでしょう。繰り返しますが、PBSで目指すのはすべての子どもと学校関係者のQOL向上です。子ども達がより豊かな人生を送っている将来の姿を想像し、教職員の想い・願いを共有することで、ポジティブ行動マトリクス作成の取組がより充実します。

子ども達に期待する「将来の姿」を共有することができたら、それに繋がっていくような「学校で期待される姿」が何かを考え、教職員間で共有し、合意形成します。通常、三つ程度のキーワードで、この「学校で期待される姿」を表します。よって、このキーワードを「三つの大切」とわかりやすく呼ぶこともあります。

「学校で期待される姿」三つの大切」に近づくには、学校の各場面・場所においてどのように行動すればよいのか具体化すれば、ポジティブ行動マトリクスの完成です。その内容は、できないと罰せられる「ルール」ではなく、できたら認められる「目標」であることが大切です。また以上のようなポジティブ行動マトリクス作成の過程において、子ども達の意見を積極的に取り入れるのもよいでしょう。

ポジティブ行動マトリクス作成の流れ



子ども達に期待する「将来の姿」について教職員の想いを話し合い共有する



「将来の姿」に繋げるための「学校で期待される姿」は何かについて話し合い合意形成する



「学校で期待される姿」を学校の各場面ごとに具体化し、ポジティブ行動マトリクスとしてまとめる

児童の実態や発達段階に応じた

柔軟な目標設定

藍住北小学校では、「話の聞き方」向上を目標として、ポジティブな行動支援に取り組みました。

学年	話の聞き方の目標
1・2	あいてに <u>おへそをむけて</u> はなしをきく。
3・4	<u>相手の方を見て</u> 話を聞く。
5・6	話し手が話を始めたら、 <u>動きを止めて体を向ける。</u> (プラス1) <u>うなずきながら話をきく。</u> (プラス2) <u>あいづちをうちながら話をきく。</u>

児童の実態や発達段階を考慮し、低・中・高学年のPBSリーダーの教員が中心となって話し合い、目標を設定しました。また、五・六年生の目標にあるように、各学年でプラスワンのステップアップの目標を考え、毎日の授業などで練習を行いました。

はなし かた
話のきき方がきちんとできると

たいせつ
・大切なことをしっかりときくことで、
べんきょう
勉強がよくわかる。

ともだち はっぴよう
・友達の発表をきくことで、いろいろな考え
し じぶん かんが ぶか
を知ることができ、自分の考えも深まる。

望ましい行動を伝える際には、Web会議システムによる朝会を活用し、上のようなスライドを提示して、「話の聞き方」を身につけることのメリットを、児童たちにわかりやすく伝えました。

また、六年生がよい話の聞き方のモデルとして登場することで、他の学年の児童は親近感がわき、自分たちの生活と結びつけて考えることができました。



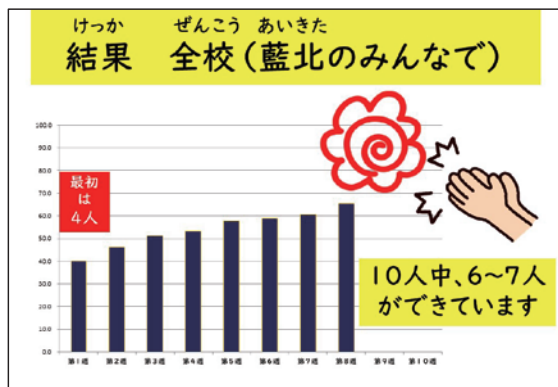
記録を活用してグラフなどで行う

ポジティブなフィードバックの工夫

藍住北小学校では、児童へのフィードバックの一つとして、よい話の聞き方ができている児童の割合を記録し、結果をグラフ化しています。

児童が望ましい行動をしたときは、その場ですぐに称賛することが重要ですが、記録をとっておくことで、振り返りに使ったり、取組が有効かをデータから判断したりすることができま

※記録処理に便利なExcelデータは、「特別支援まなびの広場」サイトにあります。
詳しくは巻末参照



「どんな言葉がうれしい？」
児童へのアンケートを活用した

ふわふわ言葉の仕掛け

高越小学校では、体育科の学習場面で「ふわふわ言葉を使うこと」を目標として、ポジティブな行動支援に取り組みました。

取組前に、体育科の活動中に友だちから言われてうれしかった言葉や、やる気が出る言葉をアンケートで調査しました。児童たちからは「ナイス!」「すごい!」などの言葉が多く出てきました。それを吹き出しに記入し、児童がよく通る玄関に掲示しました。



また、掲示した「うまいね!」や「今のよかったよ」などの言葉を、自分が使った場合や友だちから言ってもらった場合は、シールを言葉の吹き出しの中に貼るようにしました。

高い頻度で児童が使用した「ナイス!」や「がんばれ!」などの言葉には、シールを貼る場所がなくなるくらいでした。

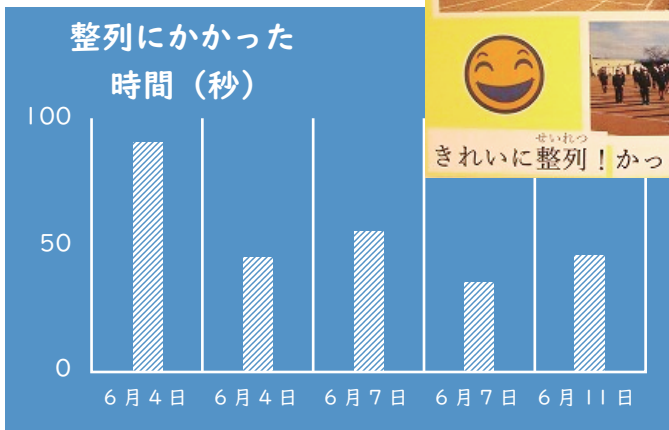
このような掲示物は、児童にふわふわ言葉を使う行動のきっかけをもたすだけでなく、ふわふわ言葉を使った後のポジティブなフィードバックとしても機能させることができます。

整列に要した時間を計測して 望ましい行動を引き出す

高越小学校では、体育科の学習場面で「すばやく集合・整列する」ことを目標として、ポジティブな行動支援に取り組みました。

事前に二列・四列・六列・半円形などの整列の仕方を児童と確認したり、教えたりして、すばやく整列する練習を行いました。

取組の中で時間を計測して児童らに知らせたり、整列できている姿を撮影した写真を見せたりして、児童のすばやく整列する行動を引き出しました。このような取組の記録を残しておくことで、児童へのフィードバックにも用いることができます。



掲示物やチケット、賞状、カードなど ポジティブなフィードバックの工夫

板野南小学校では、「みなみWAプロジェクト」として、

全校で取り組む「朝一番教室に入れあいさつを！もらったあいさつをお返ししよう！」を目標として実践を進めています。児童がよく通る通路に掲示物（左写真参照）が貼られています。



どの教室の前にも「足型」を入口の床に貼り付けていて、足型の上に立ったら「おはようございます！」とよい声が響きます。すると教室に先に來ていた児童たちからもあいさつが返ってきます。

プロジェクトが進むと上の写真の花丸が増えます。また、あいさつの取組を全員で振り返った一人ずつの温かい感想を掲載しています（左写真参照）。全員で「つながる」ことが実感できる掲示です。



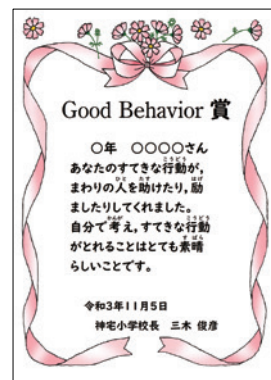
あいさつの取組を振り返って、児童一人ずつが感想を書いたものを掲示したコーナー。あいさつの取組を行い、「気持ちがいい」「うれしかった」などの児童の感想であふれている。

神宅小学校でも、本年度までの二年間、学校生活の中

で児童が人の役に立つすてきな行動（廊下に水が落ちたのでみんなが滑らないように拭く、委員会活動で欠席した児童の代役を進んで務める、トイレのスリッパをそろえる等）を増やし、自己有用感を育てるために、そのような行動が見られたときに、教職員から児童へ Good behavior (グッドビヘイビア) チケットを配付し、称賛を行う活動に取り組んでいます。



Good behavior チケット すてきな行動を具体的に書き込めるようになっている



賞状

またチケットには半券がついており、すてきな行動を行った児童は、名前を教職員から記入してもらいます。半券は児童玄関に掲示しているマスケットキャラクターの大きなカッキーくん・あたごちゃん（神宅小学校区は柿が特産品）に貼り付けられるようになっていきます。児童たちも他の児童のすてきな行動を見かけると、教職員に対して報告（推薦）するようになります。すてきな行動を重ね、このチケットを十枚もらうと、校長先生から賞状が授与されるシステムになっています。本年度は十九名の児童（全児童百十四名）が賞状を授与されました。



上：カッキーくん 下：あたごちゃん
半券が柿色になっており、半券が集まると熟した柿のように色づく



「学び(学習)」も行動として理解する

学校では「いかに子どもたちに『学び』を起こさせるか」が教員の腕の見せ所であり、ポジティブな行動支援は学習指導にも活かすことができます。

ポジティブな行動支援では、学習指導においても、具体的な行動と環境との相互作用という観点から考えます。例えば「算数が苦手」な児童がいた場合、その児童は算数の時間のどのような時(行動の前)に困っていて、やるべきだけできない行動はどんな行動で(行動)、その行動に対して教員はどのような対応をしているのか(行動の後)ということを具体化します。もしかしたら、「文章題を読んで式が立てられない」のかもしれませんが、「立式はできるけど」正しく計算することができない」のかもしれませんが、また、「国語の読解問題が苦手」な児童の場合は、困難を抱えているのは「文章を読むこと」なのかもしれないし、「(文章は読めるけど)場面のイメージが湧かない」のかもしれませんが、あるいは、「(文章は読めるけど)解答を書くこと」が苦手なのかもしれません。具体的な行動として学習の問題を捉えることで、教員がどんな支援(行動の前の工夫、行動の後の工夫)をしていけばよいのか具体的に考えることができます。

『学び』を行動として理解する枠組み



「学び手」の行動と環境(教える行為)が相互作用することにより、行動に変化が生じる(学びが生まれる)

具体的なゴールを設定する

学習指導においては、学んでほしいことを具体的なゴールとして設定することがとても有効です。

学習面で何を学んでほしいのか(教えるべきこと)については、主に学習指導要領で決められており、教科書を使用して学習指導をしていく上では普段あまり意識されないかもしれませんが、誤解を恐れずに言えば、「何を学んでほしいのかをそれほど意識しなくても、教科書を中心として進めればそれなりに学習指導はできる」ということかもしれません。これはある意味ではよい面(初任の教員でも一定の教育効果を出しやすい)とも言えます。しかし、教員(教え手)が「何を学んでほしいのか(ゴール)」を明確にしながら進めると、ゴールを達成するために指導方法をどう最適化していけばよいかが分らなくなってしまう、教科書に記載されている方法のみを使うような画一的な指導を継続することにつながってしまうかもしれません。

学習指導をする時には、どうしても「どうやって教えるか」という指導方法に意識が向きがちですが、そもそもある指導方法が適切なのかどうかというのは、学んでほしいことを学んでくれたか、つまり、ゴールが達成されたかという観点から考えることがとても重要です。ゴール地点が明確でないのに、そこに至る道筋(指導方法)を決めることはできません。とても魅力的に思える道筋(指導方法)であっても、その道を通った結果、ゴールにたどり着かなかったり、たどり着くのがとても遅かったりするのであれば適切ではないのです。

さらに、ゴールへの道筋は、個々の児童生徒によって異なることも多いです。個々の児童生徒の学びを最適化するためにも、具体的なゴールを設定しておくことは絶対に必要なこととなります。

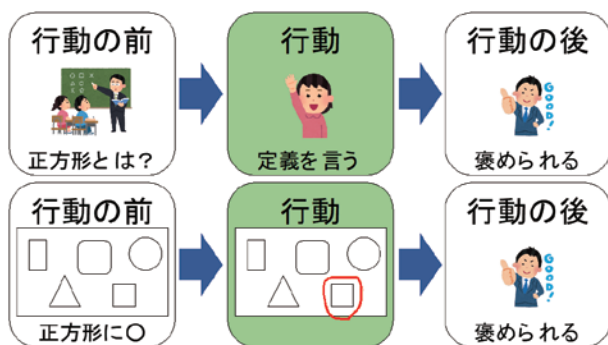


行動として理解する「正方形」

具体的なゴールを設定する際には、抽象的な「学び(学習)」というものを、「具体的にどのように行動することか」という観点で捉えることが必要です。

例えば、「正方形を理解する」ことをゴールに設定した場合を考えてみましょう。「正方形を理解する」というのは、具体的にはどういう行動をしていることを意味するのでしょうか。これを考える際には、「児童生徒がどんな行動をすれば『理解している』と判断できるか」を考えると良いでしょう。「正方形とはなんですか」という設問(行動の前)に対して、「四つの辺の長さが等しく、内角が全部直角の図形」と答える(口頭あるいは書字)ということかもしれません。もしくは、複数の図形と共に「正方形に○をつけましょう」という指示が与えられた時(行動の前)、正方形のみに○をつける、ということかもしれません。実は、一言で「理解する」や「分かる」と言っても、その形は様々な行動を意味していることが少なくありません。他者が観察できるような具体的な行動として捉えることができますれば、それらの行動をどのように増やせるかを考えることができ、結果として『理解した』という状態につながります。このような考え方は、「主体的に学ぶ」といった、より抽象的な目標にも活用することができます。

「正方形を理解する」とは？



学習問題の原因を探る

目の前の児童生徒が学習に問題を抱えている時、その原因は様々あります。すべての原因に対応することはできませんが、教員として対応ができるものについては整理して考えることが大切です。

学習問題が生じている時、まずはその問題が「できない」問題なのか「しない」問題なのかを大まかに把握することが有効です。

「できない」問題というのは、やり方がわからない（知識）、やり方はわかっているけれど実行できない（技能）という問題に分けられます。簡単に言えば「やりたくてもできない」という状態です。この場合は、知識への指導としてやり方を分かります。この場合、技能への指導として効果的な練習を行うことが効果的です。

一方で「しない」問題というのは、「やろうと思えばできるけれど、やりたくない」という問題です。つまり、動機づけの問題と言えます。この場合は、丁寧に説明したり繰り返し練習したりすることは有効ではなく、動機づけを高めるような工夫（称賛・承認の機会を増やす、やりがいを高める等）が大切になります。

例えば、児童生徒が授業中にプリントに全然取り組んでいない状況を考えてみましょう。教員が児童生徒の様子を見れば、行動としては「ぼーっとする」「私語をする」等として認識できますが、その背景には「プリントがわからない（知識の問題）」「わかるけどうまくできない（技能の問題）」「わかるしできるけどやりたくない（動機づけの問題）」が組み合わさっている可能性があります。これらの原因を厳密に区別することは現実的には難しいですが、少なくとも「できない」のか「しない」のかについてよく考えることで、適切な学習指導に繋がり、指導効果を高めることができるでしょう。

習熟段階に合わせて教える

ある学習行動を指導しようとする時、その学習行動の習熟段階を把握して、その段階に合わせて指導をすることが重要です。習熟段階には様々な段階があるのですが、特に重要なものが「獲得段階」と「流暢性段階」です。

獲得段階は、あらゆる行動を学び始める最初の段階で、「補助なしで自分で正確に実行できる」ことが目標です。この段階では、「行動の前」の工夫（お手本を見せる、ヒントをたくさん与える等）を重視して、なるべく間違わせないような指導が効果的です。ヒント付きで正確にできるようにしてきたら、少しずつヒントを減らしていき、自分だけで正確にできるようにしていきます。

流暢性段階は、獲得段階の次の段階で「獲得した行動を流暢に（正しくかつスムーズに）実行できる」ことが目標になります。少し別の言い方をすると「がんばって解く状態（獲得段階）から、がんばらなくても解けるようになる」というイメージです。この段階では、一分間など短時間の速さを強調した練習を反復し、速さの伸びを確実に伝えることが、効果的な指導方法になります。

大切なのは、この習熟段階を把握し、段階に合わせて指導を行うことです。まだ獲得段階にある学習行動に対して速さを重視した指導法を用いると、間違いが多かったり、解けても負担が大き過ぎたりして学習成果が上がりにくくなります。

一方、流暢性段階にある学習行動に対して丁寧すぎる説明をしたり、繰り返しお手本を見せたりするような指導を行うと意欲を失いやすくなります。また、たとえ速さを重視する練習を行っても、採点方法が「正確さだけの評価」だと、伸びを感じられないため（ずっと百点）、あくまで「速さの伸び」を伝えることが意欲の持続や学習成果の向上にとって大切になります。

あくまでポジティブな行動支援を

学習指導を行う時、「学校で勉強するのは当たり前」という意識や、「このやり方で教えるのが良い」という思い込みがあったりして、特定のやり方（課題）をすることに教員がこだわっていることがあります。そうすると、児童生徒はやらないうと怒られることになるため、「怒られるのを避けるために学習する」という状態になります。これは表面上は「学習する」行動が増えて見えますが、望ましいことではないでしょう。

学習指導においても、あくまで「ポジティブな行動支援」であることが大切です。なぜ「学習する」行動を増やすのかというと、**児童生徒のQOLを向上させるためです。**

「学習する」という行動は、ただ実行していることが良いのではなく、「**学習することに達成感などの良い結果が伴う経験をする**」ことが**重要なのです。**

その経験によって、「何かを学ぶこと」自体が楽しくなり、学校を卒業した後も学習行動が継続していただけるのです。「学習する」行動自体ではなく、「学習する行動が何のために実行されているか」を大切にしていきたいでしょう。

学校でありがちなこと...



“特定の課題をすること”は手段であって目的ではない
⇒ “やれば良い”というわけではない

目指すべきゴール(QOLの向上)



“何かを学ぶこと”が楽しくなる

実践事例集では、PBSの枠組みが徳島県内の教育の様々な現場で活用され始めていることを取り上げました。

PBSの取組によって幼児児童生徒の輝きがさらに増して「ひかり輝いて」きています。また、教職員の意識が変わり、「人材育成」にも役立っています。

PBSでは第一層支援により、すべての幼児児童生徒に必要な手立てを行き渡らせることと同時に、より個別的な支援である第二・三層支援も合わせて充実させていく必要があります。

そのためにもまずは各学校・園で第一層支援をマネジメントし、手立てを充実させて、校内支援体制を整備していく必要があります。

徳島県は全国よりも少子化が進み、学校・園を取り巻く人的資源や財源は必ずしも豊富とは言えません。しかしそんな徳島県だからこそ、様々な人が知恵とアイデアを出し合い、情報を共有し、ひたむきに実践を積み重ねた結果、全国に先駆けてPBSが根付いてきているのです。

PBSを徳島県の「教育的文化」と称するまでの道のりははるか遠く、乗り越えるべき険しい山や谷がいくつもあります。

いつの日か必ず、徳島県全体でPBSが標準化され、今まで以上に多くの幼児児童生徒が「ひかり輝く」ころ、障がいによる不当な取扱いのないインクルーシブで公平な社会が本県で実現することでしょう。まだまだ道半ば、前進あるのみです。

特別支援・相談課では、令和二年度から次のような動画コンテンツをアドバイザーチームに依頼して制作しました（令和三年度末現在 十五本公開中）。

学校規模ポジティブ行動支援①
(School-wide Positive Behavior Support)
ー学校全体で取り組む意義ー

大阪樟蔭女子大学
田中 美土 氏

ポジティブ行動支援の基本①
ーできているところに着目するー

大阪教育大学
野田 航 氏

ポジティブ行動支援 (PBS) とは？

畿央大学
大久保 賢一 氏

学校規模ポジティブ行動支援②
(School-Wide Positive Behavior Support)
——実践の具体的な流れ——

大阪教育大学
庭山 和貴 氏

この動画は、すべて「特別支援まなびの広場」で公開しています。短い時間でポイントを解説しています。個人研修や職員研修等でご活用ください。

<https://manabinohiroba.tokushima-ec.ed.jp/>



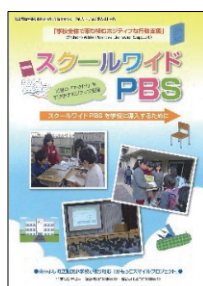
檢索

詳しくは総合教育センターホームページ

● ● ● ● ● ● ● ●このような情報や役立つ教材・研修資料等を公開しています● ● ● ● ● ● ● ●



管理職・ミドルリーダー向け



SWPBSマニュアルの決定版



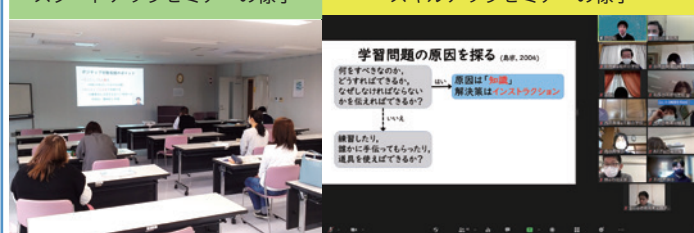
PBSを学級・学年で進めるときに

※これらのパンフレットも参考にしてください。

特別支援・相談課では、ポジティブな行動支援の浸透のため、各種セミナーやワークショップを開催しています。また、要請に応じて学校・園での研修も行っています。ご活用ください。

スタートアップセミナーの様子

スキルアップセミナーの様子



徳島県立総合教育センター特別支援・相談課

〒779-0108 徳島県板野郡板野町犬伏字東谷1-7 ☎088-672-5200 E-mail: tokubetsushien@mt.tokushima-ec.ed.jp

■このパンフレットは、徳島県教育委員会「発達障がい教育・自立促進アドバイザーチーム」が執筆・監修しました。